

第5回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会

令和2年2月14日（金）

午前10時から12時まで

特別第一会議室（別館9階）

次 第

1 開会

（1）知事挨拶

2 議事

（1）第3回静岡県総合教育会議開催結果の報告

（2）本年度の実践委員会及び総合教育会議の議論を踏まえた意見交換

（3）その他

3 閉会

< 配布資料 >

資料1 第3回静岡県総合教育会議開催結果

資料2 才徳兼備の人づくり小委員会（仮称）の設置

資料3 本年度の実践委員会の意見と総合教育会議における主な意見

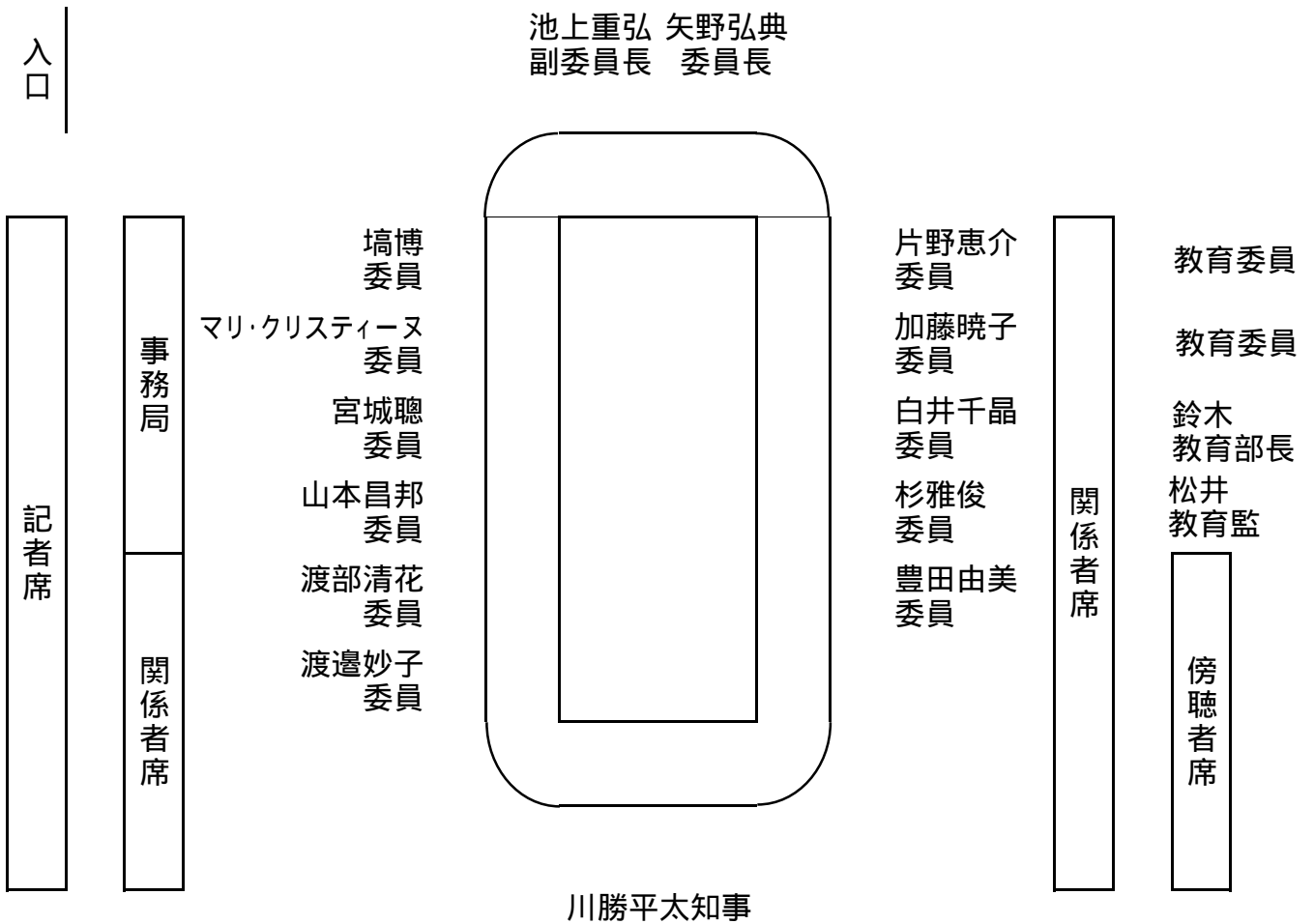
資料4 総合教育会議での協議事項への対応状況等

資料5 静岡型ホストファミリー制度について

第5回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会 座席表

日時 令和2年2月14日(金)午前10時～

場所 別館9階特別第一会議室



入口



植田 文化・観光 部長
天野 経済産業 部長
篠原 知事戦略監
池田 健康福祉 部長

地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会委員一覧

(委員長、以下 50 音順、敬称略)

氏名	役職
やの ひろのり 矢野 弘典 (委員長)	(一社)ふじのくにづくり支援センター理事長
いけがみ しげひろ 池上 重弘	静岡文化芸術大学副学長
かたの けいすけ 片野 恵介	青年農業士
かとう あきこ 加藤 暁子	日本の次世代リーダー養成塾専務理事、事務局長
きよみや かつゆき 清宮 克幸	ヤマハ発動機ジュピロアドバイザー・(一社)アザレアスポーツクラブ代表理事
しらい ちあき 白井 千晶	静岡大学人文社会科学部教授
すぎ まさとし 杉 雅俊	静岡産業大学総合研究所参与
たけはら いずみ 竹原 和泉	横浜市立東山田中学校ブロック学校運営協議会会長
とよだ ゆみ 豊田 由美	ちやの ^き 生代表
なかみち いくよ 仲道 郁代	ピアニスト、桐朋学園大学音楽学部教授
ばん ひろし 埴 博	藤枝明誠中学校・高等学校校長
ふじた ひさのり 藤田 尚徳	株式会社なすび専務取締役
マリ クリスティーヌ	異文化コミュニケーター
みやぎ さとし 宮城 聡	(公財)静岡県舞台芸術センター芸術総監督
やぶた てるあき 藪田 晃彰	日光水産株式会社代表取締役社長
やまもと まさくに 山本 昌邦	(一財)静岡県サッカー協会副会長
わたなべ さやか 渡部 清花	東京大学大学院総合文化研究科修士課程
わたなべ たえこ 渡邊 妙子	(公財)佐野美術館理事長

- 1 開催日時 令和元年11月27日（水）午前10時から正午まで
- 2 開催場所 静岡県庁別館 8 階第 1 会議室 A、B、C
- 3 出席者

静岡県知事	川勝 平太
教育長	木苗 直秀
教育委員	渡邊 靖乃
	藤井 明
	加藤 百合子
	伊東 幸宏
	小野澤 宏時
地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会	
委員長	矢野 弘典

- 4 議事 「一人一人のニーズに対応した教育の充実」

- 5 出席者発言要旨（抜粋）

出席者から以下のような意見が出された。

- (1) 伊東地区新構想高校への改編に関する意見

< 高校の在り方に関する有識者会議の設置について >

- ・ 実践委員会の代表として、高校教育の在り方について、高校再編の問題を当面の課題として、それぞれの分野の代表者が集まった有識者会議を立ち上げることを提案する。(矢野委員長)
- ・ 保護者や地元の方々の最終同意を得ていない段階で、あたかも教育委員会の既定方針であるかのごとき説明が時期尚早という点が齟齬という理解で良いか。(教育委員 1)
- ・ 前回(10/21)の実践委員会での事務局の説明が、既に方向が決まっており今後その線に沿って進めていくという内容だったため、それでは実践委員会の今までの主張と大きく懸け離れていると判断し、委員の方々から集中的に意見を述べてもらうようにした。他の委員もコミュニケーションギャップを強く感じていたので、かなり強い意見が出た。(矢野委員長)
- ・ 事務局の説明不足はあったと思うが、考え方や方向性に関しては実践委員会と教育委員会の間に大きな齟齬はないと思っている。(教育委員 1)
- ・ 高校再編を問題とするのではなく、高校の在り方に関して大いに議論することには賛成である。その際は、実践委員会の開催頻度を増やしたり、実践委員会の人数を少し絞り込んで再組成したりする手段も考えられる。(教育委員 1)
- ・ 高校再編など個別の事案に関しては、実践委員会を離れて、常設ではなく必要に応じて有識者会議を設置するパターンはあり得ると思う。(教育委員 1)

- ・高校再編は地域インパクトが非常に大きい課題である。教育委員会は専門家の意見や先行事例などを収集し地域と共有しているので、新たに有識者会議を設置することで二重になってしまうことを危惧する。(教育委員2)
- ・新たに立ち上げる場合は、教育委員会と有識者会議がきちんとチームとなって地域の人と話し合い、地域の決断をサポートすることが重要である。(教育委員2)
- ・第2回総合教育会議(9/3)で伊東地区の新構想高校について深く話し合ったが、実践委員の方々に教育委員会の思いや議論の内容が伝わるところまで伝達されていなかったのが残念に感じている。(教育委員3)
- ・教育委員会は、実践委員会で伺った意見を可能な限り取り入れ、より良い学校づくりに活かしていきたいという思いで行動し、地元と調整する形で進めている。(教育委員3)
- ・実践委員会と教育委員会両方で見守る体制は、地域を上から過剰に監視するような状況になってしまわないか非常に心配である。また、教育委員会は地域に口出しをせず、地域の自主性に任せるスタンスをとっているため、地域の方々が主体的に取り組める場づくりを考えたらどうか。会議体を設ける是非について再度深く考える必要がある。(教育委員3)
- ・新しい会議体をつくる際は、既存の会議体の役割をきちんと整理しなければますます会議体が増えて更に混乱するので、設置の妥当性を考えるためにも、実践委員会の役割を再定義する必要がある。(教育委員4)
- ・個別の地域の意見を吸い上げる場は必要であるが、決定機関が分散すると難しい問題になる。(教育委員5)
- ・提案する有識者会議は、決定機関としてではなく、深く広い意見を集めて、皆のコンセンサスを得るプロセスのために必要である。柔軟に自由な運営が可能となる場として、今後皆さんから意見を聞きながら進めていく。(矢野委員長)
- ・意見が対立せずに相乗的に機能していく組織として、互いに目指す事柄を理解した上で進めていけるのなら良いが、そうでないと難しい。(木苗教育長)
- ・教育の自立は地域の自立である。義務教育後の教育がどうあるべきかを考える時期に来ている。今後も沼津市や横須賀、池新田など高校再編に関する課題があるので、10代半ばの青少年たちをどのように教育していくかの議論はして良い。(知事)
- ・新しい会議体は教育委員会の足を引っ張るためのものではない。これをきっかけとして義務教育後、あるいは義務教育の在り方も含めて議論してもらっても結構ではないか。(知事)
- ・青少年の教育の在り方については、独自の静岡方式があって良い。実践委員会や教育委員会のそれぞれの役割を無視するのではなく、それをサポートするための有識者会議を立ち上げることは、完全に否定されたわけではない。(知事)
- ・義務教育後の教育の在り方について、どのような形で議論していくことが最適なのかを検討することに関しては、全く異論はない。(教育委員1)
- ・事務局は正しいプロセスを実行して、地元の意見を吸い上げ、地元ときちんと調整し、なおかつそれに基づいて適切な答えを導き出したと理解している。問題の発端が説明不足という点に集中しているので、そうしたコミュニケーションギャップがあったという問題はしっかり整理し、改善しなければならない。(教育委員1)

- ・義務教育後の教育については課題がたくさんあるので、集中的にものを考える場があって良い。会議で出た意見は大いに尊重してもらいたい。(矢野委員長)
- ・有識者会議の在り方を含めてひとまず保留とし、実践委員会で議論してから再度総合教育会議で報告するという形にしてはどうか。(知事)

(2) 誰もが夢と希望を持ち社会の担い手となる教育の推進

- ・国籍、年齢、性別、障害の有無に関係なく、多様性を理解しインクルーシブな環境を整備することが重要である。そのためには、教える側の精神的・物理的な余裕、個別の相談窓口の充実、保護者を巻き込んだ地域全体での取組など、施策を有効なものとするために予算付けできる体制を整えていくことが必要である。
- ・県内それぞれの地域の特色を明確に出すようにすると、一人一人のニーズに対応した教育が施せるようになっていくのではないか。
- ・外国人児童生徒や障害のある子への就労支援については、産業界との連携を密にして、地域で生きていく環境づくりを行う必要がある。
- ・特別な才能を持った子を更に伸ばす英才教育にもっと力を入れていくべきである。小・中学校から行う必要があり、その際県内で実施されている活動や成果を整理しておく、広く展開していけるのではないか。
- ・寄宿舎のあるインターナショナルスクールをつくるなど、先進的な教育をいかに静岡県が先導してやっていくかが教育委員会としての大きな課題である。そのためには、教師の意識を徹底的に変えていかなければならない。
- ・日本語教育は、単に日本語を話すことができれば誰でもできるというものではない。日本語をきちんと教えることができる教師を育成するとともに、教員免許の有無に関係なく、スキルのある人材を学校に配置できるようにすると良い。
- ・障害のある子が増えている背景として、除草剤成分の「グリホサート」の使用による影響の可能性がある。海外各国では全面禁止の方向で動いているが日本では一般に使われている。農業に関わっていない人達が危機感を持って声を上げていかなければ、状況を変えていくことはできない。
- ・外国人児童生徒に対して、中学生が小学生の面倒をみるなど子供同士でチューター制度をつくってはどうか。地域でチューター制度をつくと日本とのつながりが強くなる。
- ・不登校の児童生徒を減らす取組については、県だけではなく静岡市や浜松市の両政令市を含めて実施していかなければ改善できない。
- ・新しいことを始める際は、「小さく産んで大きく育てる」ことができるようロールモデルをつくって取り組んでいくと良い。

6 知事総括

- ・本県は教育県として新しい令和の時代にふさわしい富士山のような人材を育成していく。教育委員会でも新しい試みを遠慮せずに実行していただきたい。

才徳兼備の人づくり小委員会（仮称）の設置

1 要旨

長期的課題に対してより深く検討するため、実践委員会の下部組織として「才徳兼備の人づくり小委員会」を設置する。

長期的視点の教育テーマに対して、現況・ニーズ調査等を行い、教育を取り巻く環境の変化に対応する施策の提案を行っていく。

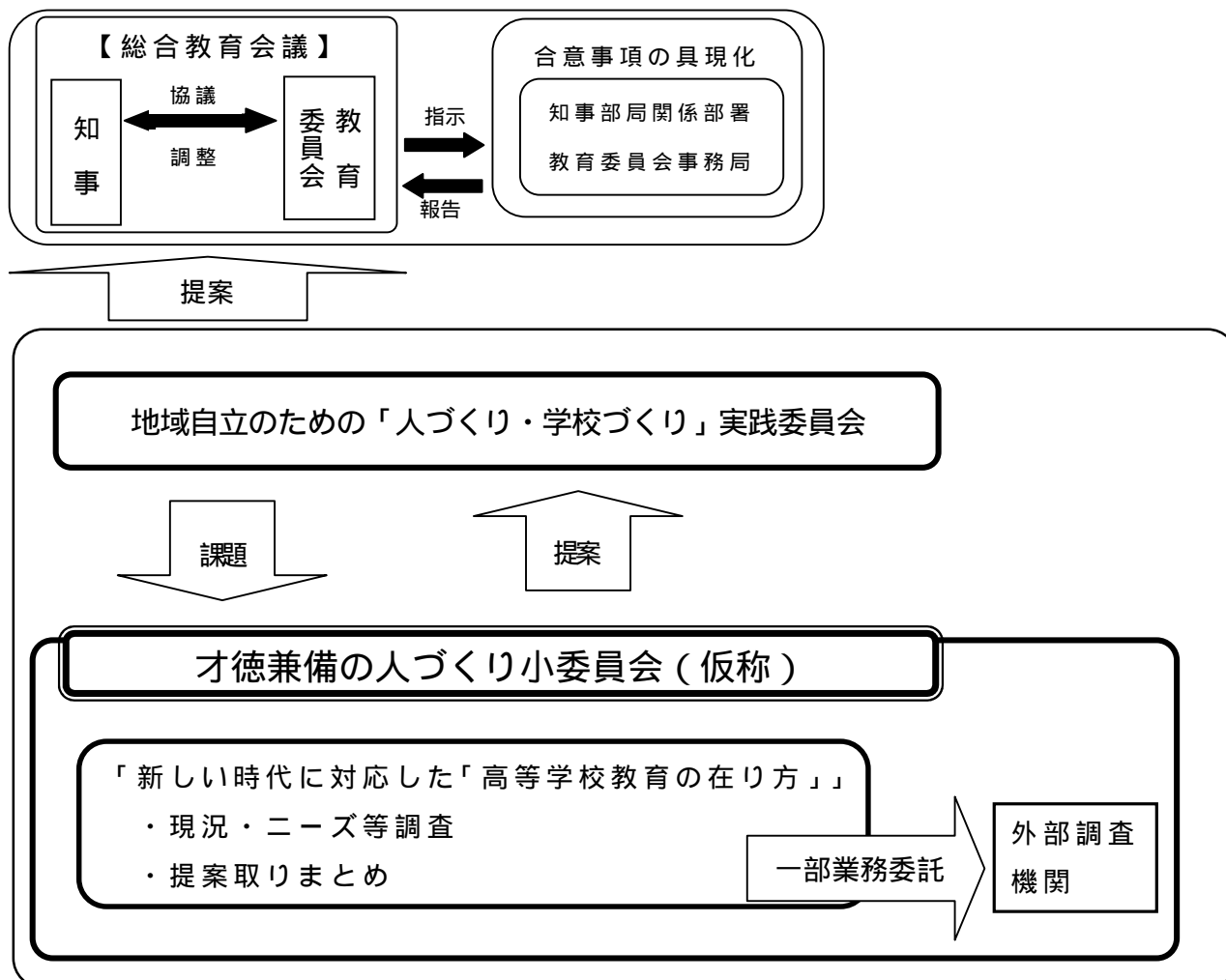
2 実施内容

区 分	内 容
名 称	才徳兼備の人づくり小委員会（仮称）
位 置 付 け	実践委員会の下部組織として設置
構 成 員	<ul style="list-style-type: none"> ・実践委員会委員：1～2名 ・教育やその分野に精通した者：3～4名 <li style="text-align: right;">計 5～6名
会議の進め方	<ul style="list-style-type: none"> ・年間を通じて1つのテーマについて意見交換(年間5回程度) ・年度途中に実践委員会に対し中間報告を行い、実践委員会からの意見を反映 ・最終的に提案を取りまとめ、実践委員会に報告
令和2年度協議テーマ	<p>「新しい時代に対応した「高等学校教育の在り方」 （検討の視点）</p> <p>(1) 地域社会との共生による高等学校教育</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の文化、産業や自然環境などの特色を活かした魅力ある教育内容と環境の整備 <p>(2) 特に秀でた才能を更に伸ばす特別な高等学校教育</p> <ul style="list-style-type: none"> ・武・芸（スポーツ、芸術、演劇など）のスペシャリストを育成する最先端の教育 <p>(3) 世界で活躍できる多様性のある人材を育成する中等教育</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国際バカロレア（IB）のプログラムの導入などグローバル人材を育成する世界共通の教育 ・多様性のある人材を育成する中学校から大学まで10年間の一貫した教育 <p>(4) 高大連携による実学教育の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実学のスペシャリストを育成する県内大学などと連結した実学教育

3 年間スケジュール

区 分	元年度	2 年度				3 年度
	第4四半期	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期	第1四半期
総合教育会議	○ ・小委員会設置報告	○	○	○	○ 提案	○
実践委員会	☆ ・小委員会設置提案 ・特定テーマ提案	☆	☆	☆ ・中間報告	☆ ・意見 最終報告 ・次年度特定テーマ決定	☆
小委員会		◇	◇ ◇	◇	◇	◇

4 事業イメージ



本年度の実践委員会の意見と総合教育会議における主な意見

国内外で活躍できる人材の育成（関係資料 P11～15）

<p>実践委員会の 主な意見 (5月15日)</p>	<p>(1) ラグビー観戦を招待する児童生徒の中で、ラグビーに興味を持っている子とそうではない子を整理すると良い。また、個別の事情を持つ子供がいるので、それぞれに配慮があっても良いのではないかな。</p> <p>(2) 大会の運営状況を学ぶ場や、大会後に担当者から大会誘致や広報等の話を聞く場など、運営側からの視点を学習できる機会があると良い。</p> <p>(3) 効果的な身近な国際化として、県内全ての県立高校に留学生を各1名受け入れてはどうか。また、教員の海外研修について、海外派遣数をもっと増やすことはできないのか。</p> <p>(4) 生徒が自ら進んで地域活動を行うようにする教育が必要。</p> <p>(5) 新構想高校への改編は地元の意見を尊重し、実際に現場を見て将来のためにどうあるべきかを考えて議論するべき。</p> <p>(6) スポーツ科の設置では、トップ選手の育成には充実した施設と優れたコーチが不可欠であり集中的投資が大切。観光科の設置では、県内の高校、大学、企業との縦の繋がりができると良い。演劇科の設置では、演劇科の生徒と普段演劇に縁の無い高校生との交流の場を地域でつくると良い。</p>
<p>総合教育会議 における 主な意見 (6月18日)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ラグビーワールドカップでは、教本や試合観戦をとおして海外の一流選手やチームの意識や考え方を学ぶ機会として活用するべき。 ・ラグビー観戦については、子供たちにどうしたいのかを徹底的に議論させて、各学校が結論を出して対応していけば良いのではないかな。 ・留学生の受け入れについては、空き家をシェアハウスとして活用し、地域の方々に面倒をみてもらうようにすると良い。 ・小、中、高校全ての学校で姉妹校を持つようにしてはどうか。 ・外国生まれ・外国育ちの家族の方々との交流をもっと大切にしたい教育を進めてはどうか。 ・教員の国際化のために、青年海外協力隊への現職教員の派遣制度をもっと活用すると良い。 ・「ふじのくに地域・大学コンソーシアム」をもっと活用し、イベント等を通じた留学生との交流など新しい形を築いていくと良いのではないかな。 ・新構想高校への改編については、選択肢は必ずしも一つではなく、統合して成功した例もあるが、そうではないケースもあるので弾力的に対処していくことが必要。

確かな学力の向上 （関係資料 P16～20）

<p>実践委員会の 主な意見 (7月30日)</p>	<p>(1) 授業でITを活用し、個人やチームで課題を見つけて解決していくような学習を進めていくと、実社会で役立つ能力を養える。</p> <p>(2) 論理的思考力を高めるためには、子供たちが国語を学ぶ目的と、学ぶことによって何の役に立つのかが見えてくるのが大切。</p> <p>(3) 学校の中に異文化を身近に感じさせるきっかけや工夫があると、子供たちの世界が広がり人生が楽しくなることを感じてもらえるのではないか。</p> <p>(4) 企業が学生に対してもっといろいろな経験やチャンスを与え自信を付けさせていくことが大切。</p> <p>(5) 13～18歳くらいの才能をどのように伸ばしていくのかを見られる指導者が必要。</p>
<p>総合教育会議 における 主な意見 (9月3日)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ICT機器を使った教育や環境整備は、行政の立場からの教育産業の育成や、デジタル機器やソフトを提供している企業とのタイアップによる工夫を考えてみてはどうか。 ・AIやICT機器の普及によって授業プログラムが確立していく時代では、教師の役割をどのようにするかをしっかりと構想していく必要がある。 ・ICT機器を家庭学習で活用する際、学校の授業と連結させて、個々の学力レベルに応じた効率的な学習が期待できる。 ・単なる教科としての英語を教えるのではなく、英語を使ってスポーツや音楽など実技科目を教えることで、学校の中で生きた英語に触れる機会をつくることできる。 ・外国語を習得するためには、日本語の語彙を増やすことと論理的思考力を身に付けることが大切であり、小・中学校における日本語教育を充実させていく必要がある。

ライフステージに対応した教育の充実 （関係資料 P16～20）

<p>実践委員会の 主な意見 (7月30日)</p>	<p>(1) 社会人が大学や大学院に進学する際、職場から学びへの橋渡しができる専門的な塾や講習の開設などのバックアップがあれば良い。</p> <p>(2) 社会人入学や大学院入学など非常に高いハードルしかないので、社会人が受けられるような専門講座を県でバックアップしていくような体制ができないか。</p> <p>(3) 県内の大学でインターネット等の講義により修得した単位を認めて、卒業や学位を取得できる仕組みがあると良いのではないか。</p> <p>(4) 育児と学びの両立を実現できるよう、高校や大学等の高等教育機関における託児所の設置を充実させると良い。</p> <p>(5) 小学校や中学校でプロジェクト・ベースド・ラーニング（課題解決型学習）を進めていく中で、大学教員や大学生が子供たちの気付きにヒントを与え、学びをサポートするような関わりが持てる仕組みにしていくと、子供たちの学力はもっと伸びていくのではないか。</p>
<p>総合教育会議 における 主な意見 (9月3日)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・年齢に関係なく、学習意欲がある人に対して、いつでも学べる場が用意されている社会が必要であり、静岡県は一度社会に出た人がいつでも勉強できる場がきちんと用意されている県になると良い。 ・外国人が年齢・性別・国籍に関わらず、参画できる具体的な仕組みを設けて欲しい。 ・子供たちの放課後の過ごし方について、地域の大人と何かを作り上げるような地域活動への参加もしっかりと評価してあげられるシステムがあると子供自身の活動に多様性が生まれ、学力向上に繋がっていくのではないか。 ・学校内ですべての活動を実施しようとするのではなく、地域や企業と連携していく体制になると良い。スポーツ分野では、学校と協力したいと思っている人達がいるので、話し合う場があれば良いのではないか。 ・社会人の学び直しだけでなく、優れた能力を持つ子供たちを更に伸ばしていく場として最も受け入れやすい教育機関は大学であり、大学コンソーシアムで全ての世代、全ての国籍の人にとって開かれている機関に変えていく必要がある。

一人一人のニーズに対応した教育の充実（関係資料 P21～28）

<p>実践委員会の 主な意見 (10月21日) (11月22日)</p>	<ol style="list-style-type: none">(1) 特別支援学校の多機能化を目指し、学校教育だけではなく地域の相談機能等(児童家庭支援センターの一部業務委託等)を持たせることはできないか。(2) 子供たちの可能性は無限大であり、充実した学校生活を過ごすためには、子供たちに力を付けていくことが大切であり、保護者の理解は不可欠である。(3) 既に日本で進学や就職して頑張っている先輩たちをロールモデルとして紹介するなど、学びに対するモチベーションへの支援が非常に重要であり、また、将来、外国人児童生徒が日本の社会で労働者として生きていく際の権利と義務を学べるサポートを手厚くしていく必要がある。(4) 多言語のコミュニケーションスキルとしてポкетークを活用するなど、子供たちのメリットが何かをまず考えることが重要。(5) 多くの外国人児童生徒にとって、悩みを聴いてくれる場所や仲間の存在は大切であり、地域社会全体で子供たちの不安を取り除く温かい支援があると良い。(6) eラーニングを活用して学習するバーチャルな制度と、高校や大学進学等に備えて直接学習支援してくれる顔の見える支援の両方を仕組みとして作ることが必要である。(7) 子供たちをやる気にさせることができる良きリーダーや指導者を育成する仕組みが必要。(8) 教師はコーチとして子供たちを導くことが大切であり、学力的な部分としっかりとした道德観や倫理観を兼ね備えた一流の教師を目指す必要がある。(9) 子供たちの能力を伸ばすためには親の関わり方は大切であり、親は子供に勇気を持たせる関わり方をしなければならない。(10) 定時制高校で途中退学する生徒が増えていかないよう、きちんと卒業まで結びつける指導が大切であり、定時制高校に通う生徒の事例研究から、サポートの手法を手厚くする必要はある。(11) 中学生を対象とした「未来を切り拓く Dream 授業」は、様々な分野で活躍し自己効力感を持った子供たちが県下に広がっていくための大きな未来への投資である。また、子供たちの才能を開花させるためには、中学校教育を改革することが不可欠である。
--	---

<p>総合教育会議 における 主な意見 (11月30日)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・国籍、年齢、性別、障害の有無に関係なく、多様性を理解しインクルーシブな環境を整備することが重要である。 ・県内の地区ごとでそれぞれの地域の特色を明確に出すようにすると、一人一人のニーズに対応した教育が施せるようになっていくのではないか。 ・外国人児童生徒や障害のある子への就労支援については、産業界との連携を密にして、地域で生きていく環境づくりを行うことが必要。 ・特別な才能を持った子を更に伸ばす英才教育にもっと力を入れていくべきであり、小・中学校から行うことが必要。 ・寄宿舎のあるインターナショナルスクールをつくるなど、先進的な教育をいかに静岡県が先導してやっていくかが大きな課題である。 ・日本語をきちんと教えることができる教師を育成するとともに、教員免許の有無に関係なく、スキルのある人材を学校に配置できるようにすると良い。 ・外国人児童生徒に対して、中学生が小学生をみるなど子供同士でチューター制度をつくってはどうか。
--	--

国内外で活躍できる人材の育成に関する論点

グローバル化が急速に進展する社会において、子供たちに豊かな国際感覚とコミュニケーション能力を育む機会を提供し、世界の中の静岡を認識し、国内外で活躍できる人材を育てていくことが必要である。

本県では、ラグビーワールドカップ2019、東京2020オリンピック・パラリンピック及び同文化プログラムが開催されることから、これらの国際イベントの開催を契機に、国際交流を通じた特色のある教育を推進することが重要である。

また、国内外で大いに活躍できる人材の育成に資するよう、県立高校においても、魅力ある教育環境の充実に取り組むことが重要である。

論点1：国際イベントの開催に伴う国際交流を通じた特色ある教育の推進

ラグビーワールドカップ2019や東京2020オリンピック・パラリンピック及び同文化プログラムなどの開催を契機に、国内外で活躍できる多様性のある人材を育成するために、具体的にどのような取組が考えられるか。

論点2：県立高校における魅力ある教育環境の充実

県立高校において、国内外で活躍できる人材を育成するための教育環境を充実させるために、新たな学校、学科等の設置や学年・学級規模の在り方を含め、具体的にどのような取組が考えられるか。

実践委員会の意見の総括

< 論点1：国際イベントの開催に伴う国際交流を通じた特色ある教育の推進 >

- ・ラグビー観戦に招待した児童生徒が、世界的イベントを途中帰宅することなく最後まで観戦できるようにするために、保護者へは帰宅時間が遅くなることを事前連絡の上、安全確保のために細かい約束事などをつくって説明し、理解を求めると良い。
- ・観戦を招待する児童生徒の中で、ラグビーに興味を持っている子とそうではない子を整理すると良い。また、子供たちに本物のスポーツとして観戦させたいのか、一方、ラグビーをたくさんの人に触れさせたいから観戦させるのか、その目的によって手法が変わってくる。
- ・最後まで観戦することは基本だが、身体の弱い子や習い事がある子など個別の事情を持つ子供がいるので、それぞれに配慮があっても良いのではないか。
- ・大会当日の運営状況を学ぶ場や、大会後に担当者から大会誘致や広報等の話を聞く場など、運営側からの視点を学習できる機会があると良い。

< 論点2：県立高校における魅力ある教育環境の充実 >

- ・効果的な身近な国際化として、県内全ての県立高校に留学生を各1名受け入れてはどうか。課題としては、留学生を預かれるホストファミリーがなかなか見つからないことがある。また、教員の海外研修について、海外派遣数をもっと増やすことはできないのか。
- ・グローバル人材の育成はローカル人材の育成に繋がるので、生徒が自ら進んで地域活動を行うようにする教育が必要である。
- ・新構想高校への改編については、地元の意見を尊重し、実際に現場を見て、将来のためにどうあるべきかを考えて議論するべきである。
- ・スポーツ科の設置では、トップ選手の育成には充実した施設と優れたコーチが不可欠であるので集中的投資が大切である。観光科の設置では、県内の高校、大学、企業との縦の繋がりができると素晴らしい。演劇科の設置では、演劇科の生徒と普段演劇に縁の無い高校生との交流の場を地域でつくと良い。

国内外で活躍できる人材の育成に関する実践委員会の意見

論点1：国際イベントの開催に伴う国際交流を通じた特色ある教育の推進

小中学生のラグビーワールドカップ観戦に関する意見

観戦を招待した児童生徒が、帰宅時間が遅くなるといった理由で世界的イベントを途中退席することなく、保護者や地域、ボランティアの協力を得て安全を確保することで、試合終了まで観戦できるようにすることが大切ではないか。(清宮委員)

子供たちの観たいという興味が大切である。本当に観戦したい子や保護者を招待しないと意味が無いのではないか。保護者には、事前に帰宅時間が遅くなるなどデメリットを伝え、理解してもらった上で招待しないと、誤解が生じるのではないか。(豊田委員)

小中学生にとって、試合終了時刻が完全下校時刻を過ぎていることから、学校教育の中だけではなく、地域総がかりで教育をするという視点が必要であり、地域コーディネーター等が先生方と共同して引率することや、細かい約束事項をつくって保護者に確認を取ると良いのではないか。(竹原委員)

招待する児童生徒の中で、ラグビーに興味を持っている子とそうではない子を整理すると良い。世界レベルの試合を観戦することで、世界を目指そうとする子供が出てくるので、参加する団体が興味関心を高め、最後まで観戦できる方法を保護者の了解を得て実施すると良いのではないか。(山本委員)

ラグビーを観戦させる目的がぶれないようにすることが大事である。本物のスポーツを観せることが目的であれば、試合終了まで観戦して最後までやり切ることの大切さを参加者に伝える。一方、ラグビーをたくさんの人に触れさせることが目的であれば、途中退席しても帰りのバスで観戦できるようにしてラグビーを経験させるなど、目的によって手法が変わってくるのではないか。(藤田委員)

最後まで観戦することは基本だが、身体の弱い子や習い事がある子など個別の事情を持つ子供がいるので、それぞれに配慮があっても良いのではないか。(矢野委員長)

滅多にない世界大会の運営のマネジメントを学ぶ機会として、大会当日に運営状況を学べる場や、大会後に担当者から大会誘致、広報、準備等について学べる場をつくるなど、運営側からの視点を学習できる機会があると良いのではないか。(杉委員)

県内のスポーツ振興に関する意見

県内各地域で世界的なスポーツイベントが開催されている。世界のトップ選手のプレーや技術を見て、肌で感じることで子供たちは興味を持って好きになっていくので、それぞれの地域が持つスポーツイベントについても県で後押しして欲しい。(藪田委員)

その他の意見等

国内外で活躍できる人材の育成という視点から、障害のある外国籍の児童生徒及びその保護者に対して、日本語サポートや日本で生活していく上で必要な知識や技術の習得機会を特別支援学校や特別支援学級のカリキュラムの中に組み入れていくことはできないか。(豊田委員、池上副委員長)

論点 2：県立高校における魅力ある教育環境の充実

教育環境の充実に関する意見

留学生が一人学校に入ると化学変化が起こり、日本の高校生への大きな刺激となる。日本の高校で農業・工業・商業などを学びたいと希望するアジアの学生は多いので、効果的な身近な国際化として、普通科に限らず県内全ての県立高校に留学生を各1名受け入れてはどうか。ただ、留学生を預かれるホストファミリーがなかなか見つからないことが課題である。(加藤委員)

世界はもっと多様であることを教員が知らないと言徒たちに伝える事ができない。多くの教員が海外に出て見識を広げるために、教員の海外派遣数をもっと増やすことはできないか。(宮城委員)

グローバル人材の育成は、ローカル人材の育成に繋がる。地域が自立できない側面があることから、学校は地域と一体でなければならない。生徒が自ら進んで地域活動を行うようにする教育が必要である。(埴委員)

新構想高校への改編については、色々な選択肢があって良いが、地元の意見を尊重して進めていくべき事項なので、紙資料をベースに話し合うのではなく、実際に現場を見て、将来のためにどうあるべきかを考えて議論を進めていくべきである。(矢野委員長)

新学科の設置等に関する意見

〔スポーツ科〕

スポーツ科を設置する場合は、充実した施設と優れたコーチがいなければ全国のトップレベルにすることは難しいので、集中的に投資することが大切である。(山本委員)

〔観光科〕

県内大学でも観光に関する専門的なカリキュラムが始まっている。高校時代からの実践的な学びを経て、強い動機をもった生徒が県内の大学で更なる学びを深め、そして県内の観光関係の仕事に就いて静岡県の魅力を発信できるといった繋がりができると素晴らしい。(池上副委員長)

〔演劇科〕

今の学校教育では、人と違うことを考える若者を育てることは難しい。正解のない演劇を学ぶ場がもっと広がらないか。高校時代に世界第一線のアーティストと接することは意味があるのではないか。また、演劇科の生徒と、普段演劇に縁の無い高校生とが、演劇を通じて交流できる場を地域でつくと良いのではないか。(宮城委員)

その他の意見等

世界で活躍する子供を育成するためには、中学校から改革していくことが重要である。一芸に秀でた子の中学校3年間でどのように指導していくか、また才能のある子にどのように刺激を与えていくかが大切である。(山本委員)

最近では、演劇科を設置している大学が増えており、演劇の道に進みたい学生は最初から演劇科に進学している。そのため、他学部の学生は演劇をやっている面白い人たちと接する機会が無い。可能であれば「ふじのくに地域・大学コンソーシアム」の中で演劇を授業として組み込ませてもらえたら良いのではないか。(宮城委員)

高大連携について、静岡県には「ふじのくに地域・大学コンソーシアム」が設立されており、異文化交流での留学生の活用や、スポーツをとおした地域づくり、アートをとおした県内産業の活性化など、高校の観光科や総合学科等との連携をもっと進めていけるのではないか。(白井委員)

協議事項 生涯にわたり学び続ける教育の充実に関する論点

技術革新やグローバル化の更なる進展等により、様々な変化が予想される中、誰もが生き生きと活躍し、豊かで安心して暮らせる社会を実現するためには、生涯にわたり主体的に学び続けられる環境の整備が必要である。

そのためには、小学校から高等学校にかけては、基礎的・基本的な知識・技能と思考力・判断力・表現力等を身に付けさせるとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うことにより、確かな学力の向上を図ることが重要である。

さらに、一人一人が様々な社会変化を乗り越えながら、生涯にわたって学び続ける意欲を保ち、ライフステージに応じた学びの機会を確保できる環境づくりが重要である。

これらの取組により、生涯を通じて「才徳兼備」の人材を育む教育を推進していく必要がある。

論点1：確かな学力の向上

確かな学力の向上に向けて、新しい時代に必要となる資質・能力を育成し、きめ細かな教育を進めるためには、具体的にどのような取組が考えられるか。

【検討の視点】

- ・知識の理解の質を高める読解力、論理的思考力等の育成
- ・英語教科化に対応した外国語教育の充実
- ・全国学力・学習状況調査の効果的な活用
- ・優れた能力を更に伸ばすことのできる教育の充実

論点2：ライフステージに対応した教育の充実

それぞれのライフステージにおいて、誰もが必要な知識・技能を身に付け、自らの可能性を最大限に伸ばすことのできる教育を実現するために、具体的にどのような取組が考えられるか。

【検討の視点】

- ・社会人の実践的な職業教育や学び直しへの対応
- ・社会人を対象にした学習機会の充実
- ・高等教育機関（大学等）と初等・中等教育（小学校～高等学校）との連携の在り方

生涯にわたり学び続ける教育の充実に関する実践委員会の意見の総括

< 論点 1 : 確かな学力の向上 >

- ・授業でITを活用し、個人やチームで課題を見つけて解決していくような学習を進めていくと、実社会で役立つ能力を養える。また、子供の自発性を伸ばす教育は、子供にとって学びが楽しくなるのではないか。
- ・論理的思考力を高めるためには、子供たちが国語を学ぶ目的と、学ぶことによって何の役に立つのかが見えてくるのが大切ではないか。
- ・学校の中に異文化を身近に感じさせるきっかけや工夫があると、子供たちの世界が広がり人生が楽しくなることを感じてもらえるのではないか。
- ・学生時代から実社会で活かせる能力を育むために、学校だけではなく、企業が学生に対してもっといろいろな経験やチャンスを与えて、彼らに自信を付けさせていくのが大切ではないか。
- ・13~18歳くらいの才能をどのように伸ばしていくのかを見られる指導者が必要である。

< 論点 2 : ライフステージに対応した教育の充実 >

- ・社会人が大学や大学院に進学する際、職場から学びへの橋渡しができる専門的な塾や講習の開設などのバックアップがあれば良い。また、社会人入学や大学院入学など非常に高いハードルしかないので、社会人が受けられるような専門講座を県でバックアップしていくような体制ができないか。
- ・県内の大学でインターネット等の講義により修得した単位を認めて、卒業や学位を取得できる仕組みがあると良いのではないか。
- ・育児と学びの両立を実現できるよう、高校や大学といった高等教育機関における託児所の設置を充実させると良いのではないか。
- ・小学校や中学校でプロジェクト・ベースド・ラーニング（課題解決型学習）を進めていく中で、大学教員や大学生が子供たちの気付きにヒントを与え、学びをサポートするような関わりが持てる仕組みにしていくと、子供たちの学力はもっと伸びていくのではないか。

実践委員会での意見（詳細）

論点1：確かな学力の向上

新しい時代に必要となる資質・能力の育成に関する意見

子供たちが主体的に学習に取り組むために、授業でITを活用し、個人やチームで課題を見つけて解決していくような学習を進めていくと、実社会に出たときに必要な企画立案・実践といった能力を養えるのではないかと。（渡部委員）

他県で複数の学校の生徒たちがスマートフォンの使い方についてディスカッションした結果、当事者目線で様々な提案や意見が出された好事例があった。このような子供の自発性と主体性を伸ばす教育を進めていくと、子供たちにとって学びが楽しくなるのではないかと。（竹原委員）

論理的思考力を高めるためには、国語の能力を高めなければならない。国語を学ぶ目的と、学ぶことによって何の役に立つのかが見えてくるのが大切ではないかと。（宮城委員）

優れた能力を更に伸ばすことができる教育の実現に関する意見

語学はビジネスのためだけに学ぶのではなく、異文化を知って自分の世界を広げるために学ぶべきなので、学校の中に異文化を身近に感じさせるきっかけや工夫があると、子供たちの世界が広がり人生が楽しくなることを感じてもらえるのではないかと。（宮城委員）

学生時代から実社会で活かせる能力を育むために、学校だけではなく、企業が学生に対してもっといろいろな経験やチャンスを与えて、彼らに自信を付けさせていくことが大切ではないかと。（藤田委員）

子供たちの才能を伸ばすには良い指導者と環境が不可欠であり、13～18歳くらいの才能をどのように伸ばしていくのを見られる指導者が必要である。そうした指導者を育成できる研修の仕組みをつくるのが大切ではないかと。（山本委員）

その他の意見等

学力を上げるためには、なるべく多くの科目で習熟度別授業を実施し、テストのたびに生徒の入れ替えをしながら授業のレベルを変えていくと成果は出る。(埴委員)

- 子供たちのスマートフォンの使い過ぎの問題と、家庭での食の問題を改善しないと、確かな学力を向上させることは難しいのではないか。(埴委員)

論点2：ライフステージに対応した教育の充実

社会人を対象にした学習機会の充実に関する意見

社会人が大学や大学院へ入学・進学する際、受験勉強が大変なので、職場から学びへの橋渡しができる専門的な塾や講習の開設などのバックアップがあれば良いのではないか。(白井委員)

単発の公開講座を受けるということではない学びを求める人にとって、現状では社会人入学や大学院入学など非常に高いハードルしかないので、社会人が受けられるような専門講座を県でバックアップしていくような体制ができないか。(池上副委員長)

日本は資格社会であるので、県内の大学でインターネット等の講義により修得した単位を認めて、卒業や学位を取得できる仕組みを考えてみてはどうか。(マリ委員)

生涯学習の観点から、育児と学びの両立を実現できるよう、高校や大学といった高等教育機関における託児所の設置を充実させると良いのではないか。(白井委員)

県の生涯学習情報発信システムに学習の場を提供する側として登録していた。良いツールなので、もっと参加者の興味を引くような周知の仕方や、有効に活用する方策を再度検証してみてはどうか。(豊田委員)

高等教育機関と初等・中等教育との連携の在り方に関する意見

大学教員が一方的に話すことや、単に施設見学で終わるのではなく、小学校や中学校でプロジェクト・ベースド・ラーニング(課題解決型学習)を進めていく中で、大学教員や大学生が子供たちの気付きにヒントを与え、学びをサポートするような関わりが持てる仕組みにしていくと、子供たちの学力はもっと伸びていくのではないか。(池上副委員長)

その他の意見等

勉強することも大切だが、豊富な経験を活かすシルバー人材のように、定年後も自分の好きなことや得意なことを活かして、社会に関わっていくことは大切なことである。(山本委員)

人間は学び続けることが大切であり、自ら学べば、何でもどんなところでも入り込める。学ぶことが増えれば、役に立つことも広がる。それが人生の判断材料にもなるし、よりよい人間関係を構築するのにも非常に重要になる。(山本委員)

一人一人のニーズに対応した教育の充実に関する論点

一人一人が活躍し、豊かで安心して暮らせる社会を実現するためには、誰もがいつでも新しいことにチャレンジできるとともに、それぞれの夢に向かって挑戦できる環境を整備することが必要である。

多様な人々が社会で生き生きと活躍できるようにするために、特別支援教育においては、障害のある幼児児童生徒の自立と社会参加を目指し、一人一人の教育的ニーズに対応した指導の充実と切れ目ない支援体制の構築を図ることが重要である。

また、外国人労働者受入れ拡大も踏まえ、異なる文化的背景を持つ人々が共に支えあい、共に学びあう教育環境の充実に向けて、増加する外国人児童生徒等に対する支援の充実を図る必要がある。

そして、全ての子供たち一人一人が夢の実現のために挑戦を続け、優れた能力を更に伸ばすことができる教育を推進することが重要である。

論点：誰もが夢と希望を持ち社会の担い手となる教育の推進

全ての人々が、自らが持つ能力・可能性を最大限に伸ばし、夢や希望を持って社会の担い手となれる教育を推進するために、具体的にどのような取組が考えられるか。

【検討の視点】

- ・特別支援教育における就学前から就労までの切れ目のない支援、特に増加する発達障害のある子供への支援の充実
- ・外国人児童生徒等に対する日本語指導をはじめとする幅広い学び、キャリア教育の充実
- ・子供たち一人一人の夢の実現に対応した教育の提供

<伊東地区新構想高校への改編について>

(第3回実践委員会)

- ・人口減少を理由として学校の統廃合を進める考え方は、非常に後ろ向きであり、本来その地域にある特色や良さを塗り潰していくように感じる。国内のみならず国外から生徒を募集することにも目を向けて、分校として存続させていくことはできないか。
- ・城ヶ崎も含めた伊東市全体にアートの聖地のようなイメージを持たせる構想とすることが大切である。場所が移っても特色ある教育を最大限に活かせる教育が必要である。分校跡地はアトリエなどの関連施設として活用していくと良い。
- ・既存の芸術科のある高校の創作活動を企業と連携して官民一体となって支援し広報するなど、県として何ができるのか考えていくことが必要である。また、商業と美術をくっつけて両方の良さを活かすと新たな教育が生まれてくる。
- ・芸術家を育てるためには、自然に囲まれている環境は有利だが、他者の作品をみる機会も必要である。アトリエのような創作活動の場と他の作品に触れる交流の場を両立できる学校になれば良い。
- ・静岡県を牽引する人材を育成するために、一流の指導者や才能のある生徒を集めることが重要である。海外から学生を受け入れることを視野に入れ、城ヶ崎分校の建物を寮に改築することも考えられる。
- ・保護者や地元の方々の最終同意を得ていない段階で、あたかも教育委員会の既定方針であるかのごとき説明は時期尚早である。

(第4回実践委員会)

- ・新構想高校では、商業科とアートコース、さらに特別支援学校の生徒たちの融合によるシナジー効果(相乗効果)が期待できる。「アートの聖地づくり」では、伊東の環境やアートに惹かれて海外から学びに来る学生を受け入れるような教育の仕組みづくりを考えていくと良い。

- ・3校が一つの校舎に集まることでこれまで無かった新たな可能性をカリキュラムの中に取り込んでいけるような意識を前面に出していくと地域の支持を得られるのではないか。
- ・高校教育の在り方について、高校再編の問題を中心に置いて、教育委員会や実践委員会から委員を選出し、さらに地域の代表も加えた有識者会議を開催して議論を進めていくと齟齬がなくなる。

<全国学力・学習状況調査の結果の活用について>

- ・地域や保護者に結果をきちんと公表して、子供たちの通う学校の現状を把握してもらうことが本当の有効活用の方法である。
- ・地域に貢献できる人材育成の観点からは、勉強以外にも子供たちに規則正しい生活習慣を身に付けさせることが大切である。子供たちは様々な人と接することで才能を開花させていくので、コミュニティ・スクールなどを活用し、環境整備に目を向けていく必要がある。

<論点：誰もが夢と希望を持ち社会の担い手となる教育の推進>

(特別支援教育における支援の充実)

- ・静岡県の特例支援教育は、子供と教師の関係がマンツーマンに近く、非常に行き届いた教育をしている。
- ・特別支援学校の多機能化を目指すが良い。学校教育だけではなく地域の相談機能等(児童家庭支援センターの一部業務委託等)を持たせることはできないか。
- ・子供たちの可能性は無限大であり、充実した学校生活を過ごすためには、子供たちに力を付けていくことが大切であり、保護者の理解は不可欠である。平均値に頑張っただけで付いて行こうとする子供たちへの教育や支援を無視してはいけない。

(外国人児童生徒への幅広い支援の充実)

- ・既に日本で進学や就職して頑張っている先輩たちをロールモデルとして紹介するなど、学びに対するモチベーションへの支援が非常に重要である。また、将来、外国人児童生徒が日本の社会で労働者として生きていく際の権利と義務をきちんと学べるサポートを手厚くしていく必要がある。

- ・多言語のコミュニケーションスキルとしてポケトークを活用するなど、子供たちのメリットが何かをまず考えること、そして生徒を直接指導する教師の負担を減らし、どのようにサポートしていくかが重要である。
- ・多くの外国人児童生徒にとって、悩みを聴いてくれる場所や仲間の存在は大切である。地域社会全体で子供たちの不安を取り除く温かい支援があると良い。
- ・eラーニングを活用して学習するバーチャルな制度と、高校や大学進学等に備えて直接学習支援してくれる顔の見える支援の両方を仕組みとして作る必要がある。また、子供たちだけではなく、支援する側へのサポートや教員への研修が必要である。単に日本語ができるだけでは効果的な支援は難しい。

(子供たち一人一人の夢の実現に対応した教育の提供)

- ・子供たちに寄り添い、良いところを気付かせ、やる気にさせることができる良きリーダーや指導者を育成する仕組みが必要であり、そうした人材を育成する経験豊富なインストラクターをつくらなければ子供たちの成長につながっていかない。
- ・教師はコーチとして子供たちを導くことが大切であり、学力的な部分としっかりとした道德観や倫理観を兼ね備えた一流の教師を目指す必要がある。
- ・子供たちの能力を伸ばすためには親の関わり方は大切であり、親は子供に勇気を持たせる関わり方をしなければならない。また、学校が多様化し、様々な環境と機会を提供していく必要がある。
- ・定時制高校で途中退学する生徒が増えていかないよう、きちんと卒業まで結びつける指導が大切である。定時制高校に通う生徒の事例研究から、サポートの手法を手厚く研究する必要がある。
- ・中学生を対象とした「未来を切り拓く Dream 授業」は、様々な分野で活躍し自己効力感を持った子供たちが県下に広がっていくための大きな未来への投資である。また、子供たちの才能を開花させるためには、中学校教育を改革することが不可欠である。

第3回・第4回 実践委員会の意見（詳細）

第2回総合教育会議開催結果に関する発言

伊東地区新構想高校への改編に関する意見

〔第3回実践委員会〕

人口減少を理由として学校の統廃合を進める考え方は、非常に後ろ向きであり、本来その地域にある特色や良さやを塗り潰していくように感じる。（片野委員）

城ヶ崎も含めた伊東市全体にアートの聖地のようなイメージを持たせる構想とすることが大切である。（杉委員）

新構想高校で芸術が学べるように、場所が移っても特色ある教育を最大限に活かせる教育をしていく必要がある。分校跡地はアトリエなどの関連施設として活用していくと良いのではないか。（杉委員、竹原委員）

芸術分野の魅力ある学校として、国内のみならず国外から生徒を募集することにも目を向けて、分校として存続させていくことはできないか。（片野委員、渡邊委員）

県内に芸術分野に注力する高校が2校も3校も必要なのか疑問である。既存の芸術科のある高校の創作活動を企業と連携して官民一体となって支援し広報するなど、県として何ができるのか考えていくことが必要である。（藤田委員）

芸術家を育てるためには、自然に囲まれている環境は有利だが、フラスコの中に入ったようにしてつくっていても、他者の作品をみる機会がなければある線を突破できない。アトリエのような創作活動の場と他の作品に触れる交流の場を両立できる学校になれば良い。（宮城委員）

日本の高校へ留学を志望する学生は、ホームステイではなく寮滞在の希望者が多い。海外から学生を受け入れることを視野に入れ、城ヶ崎分校の建物を寮に改築することも考えられる。（加藤委員）

パイロットスタディケースとして、商業と美術をくっつけて両方の良さを活かすことで、新たな教育が生まれてくるのではないか。（マリ委員）

保護者や地元の方々の最終同意を得ていない段階で、あたかも教育委員会の既定方針であるかのごとき説明は時期尚早であると言わざるを得ない。（矢野委員長）

静岡県を牽引するようなリーダーを育てる仕組みをつくるためには、予算を獲得し、一流の指導者や才能ある生徒を集めることが重要である。（山本委員）

分校を存続させることには、存続させたいと気持ちを寄せている人や地元の意見などがつながらない限り、理想だけを述べても難しいのではないかと。(渡部委員)

生徒自らが講師を呼ぶなど授業を生徒がつくっていくような公立高校が全国に先駆けてできると、静岡から多様性に触れる教育のモデルケースになっていくのではないかと。(渡部委員)

[第4回実践委員会]

新構想高校では、商業科とアートコース、さらに特別支援学校の生徒たちの融合によるシナジー効果(相乗効果)が期待できる。「アートの聖地づくり」では、伊東の環境やアートに惹かれて海外から学びに来る学生を受け入れるような教育の仕組みづくりを考えていくと良い。(片野委員)

例えば、「特別支援学校」と「アート」が生み出す「障害者アート」や、「特別支援学校」と「観光」が生み出す「製品プロデュース」など、3校が一つの校舎に集まることでこれまで無かった新たな可能性をカリキュラムの中に取り込んでいけるような意識を前面に出していくと地域の支持を得られるのではないかと。(池上副委員長)

来年開催のオリンピック・パラリンピックを機会に、パラリンピアンに来てもらえるような環境整備と交流できる体制づくりをすると良い。(マリ委員)

高校の在り方に関して今後も見続けてフォローする協議体が必要ではないかと。高校再編の問題を中心に置いて、教育委員会や実践委員会から委員を選出し、さらに地域の代表も加えた有識者会議を開催して議論を進めていくと齟齬がなくなる。(矢野委員長)

全国学力・学習状況調査の結果に関する意見

全国学力・学習状況調査の結果を教師の授業改善だけに活用するのではなく、地域や保護者にきちんと公表して子供たちの通う学校の現状を把握してもらうことが本当の有効活用の方法である。(矢野委員長)

地域に貢献できる人材育成の観点からは、小学校では勉強以外にも、運動、食事、睡眠、遊びなども重視し、子供たちに規則正しい生活習慣を身に付けさせることが重要である。(杉委員)

子供たちは地域の行事に参加することを通じて地域とつながっているが、学校はあまり保護者や地域と協働して活動していないのはもったいない。子供たちは様々な人と接することで才能を開花させていくので、コミュニティ・スクールなどを活用し、環境整備に目を向けていく必要がある。
(池上副委員長、竹原委員)

子供たちに自ら勉強したくなるような夢や目標を持たせ、自分の得意なことや好きなことを世の中で役立たせるにはどうしたら良いかを意識付けしていくことは、勉強ができること以上に重要である。(山本委員)

論点：誰もが夢と希望を持ち社会の担い手となる教育の推進に関する発言

特別支援教育における支援の充実に関する意見

静岡県の特別支援教育は、子供と教師の関係がマンツーマンに近く、非常に行き届いた教育をしている。是非、実践委員の方々には実際に教育現場をみてもらいたい。(矢野委員長)

特別支援学校の多機能化を目指すが良い。学校教育だけではなく地域の相談機能等(児童家庭支援センターの一部業務委託等)を持たせることはできないか。(白井委員)

発達障害の児童生徒は多数おり、留学生の中にも障害のある生徒はいる。子供たちの可能性は無限大であり、充実した学校生活を過ごすためには、子供たちに力を付けていくことが大切であり、保護者の理解は不可欠である。(埜委員)

もっと上を目指したいと考える子供たちへの専門性の高い教育も大切だが、平均値に頑張っけて付いて行こうとする子供たちへの教育や支援を無視してはいけない。(矢野委員長)

外国人児童生徒等に対する支援の充実に関する意見

外国人児童生徒をサポートする活動では、学習面以外でも既に日本で進学や就職して頑張っている先輩たちをロールモデルとして紹介するなど、学びに対するモチベーションへの支援が非常に重要である。
(池上副委員長)

将来、外国人児童生徒が日本の社会で労働者として生きていく際の権利と義務をきちんと学べるサポートを手厚くしていく必要がある。
(池上副委員長)

他県の事例では、多言語のコミュニケーションスキルとしてポケトークが学校で多く使われている。態勢やマニュアルばかり議論するのではなく子供たちのメリットは何かをまず考えること、そして生徒を直接指導する教師の負担を減らし、どのようにサポートしていくかが重要である。
(山本委員)

多くの外国人児童生徒にとって、悩みを聴いてくれる場所や仲間の存在は大切である。段階的にその子に合った社会教育を行っていく必要があるが、資金も人材も足りない現状では、地域社会全体で子供たちの不安を取り除く温かい支援があると良い。(杉委員)

学習支援については、eラーニングを活用して今の生活をリセットしなくても学べるバーチャルな制度と、高校や大学進学等に備えて直接学習支援してくれる顔の見える支援の両方を仕組みとして作ることが必要である。(白井委員)

子供たちだけではなく、支援する側へのサポートや教員への研修が必要である。また、日本語教室のスタッフが日本語教育の研修を受けられていない。単に日本語ができるだけでは効果的な支援は難しい。(白井委員)

子供たち一人一人の夢の実現に対応した教育の提供に関する意見

子供たちに寄り添い、良いところを気付かせ、やる気にさせることができる良きリーダーや指導者を育成する仕組みが必要である。また、そうした人材を支援し育成できる経験豊富なインストラクターをつくらなければ子供たちの成長につなげていけない。(山本委員)

子供たちの能力を伸ばすためには親の関わり方は大切であり、子供たちの才能を伸ばすこともあるが、逆に芽を摘んでしまうこともある。親は子供に勇気を持たせる関わり方をしなければならない。(山本委員)

子供たちに学習への目的意識を持たせるためには、学校が多様化し、様々な環境と機会を提供していく必要がある。子供たちが反応したことを教師が指導に活かしていくことが大切である。(埴委員)

答えを教えるのではなく、答えの導き方を教えるという観点から、教師はコーチとして子供たちを導くことが大切であり、学力的な部分としっかりとした道徳観や倫理観を兼ね備えた一流の教師を目指す必要がある。(藤田委員)

定時制高校において途中退学してしまう生徒が少なからずいる現状では、きちんと卒業まで結びつける指導が大切である。定時制高校に通う生徒の事例研究から、サポートの手法を手厚く研究する必要がある。(池上副委員長)

「未来を切り拓く Dream 授業」の昨年度参加者による一年後アンケートの内容から、様々な分野で活躍し、自己効力感を持って新たな一步を踏み出している生徒たちの姿が読み取れる。こうした先駆的な取組をする子供たちが県下に広がっていく「Dream 授業」は、大きな未来への投資である。(池上副委員長)

子供たちの才能を開花させるためには、中学校教育を改革することが不可欠である。心も身体も大きく成長する重要な時期なので、例えば学区を解体して、専門的な指導者がいる学校へ放課後通えるようにするなど、充実した3年間をサポートする仕組みづくりが必要である。(山本委員)

企業と連携した静岡型ホストファミリー制度(案)

資料 5

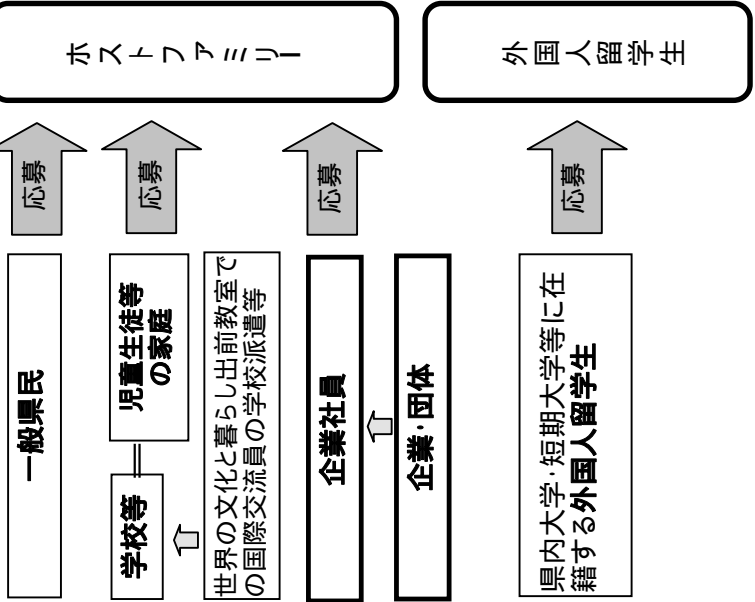
趣旨

急速なグローバル化が進む中、海外からの外国人留学生は年々増加しており、グローバル人材の育成や海外からの優れた人材の確保に向けて、今後も積極的に留学生の受入れを進めていく必要がある。
 このようなか、企業、団体や自治体が協働し、県民と外国人留学生との交流を図り、お互いの生活・文化に触れることにより、県民の国際化を図るとともに、外国人留学生の静岡県への愛着心を育ませ、帰国後の活動を通じて、静岡県の情報発信や有能な人材の確保を推進する。

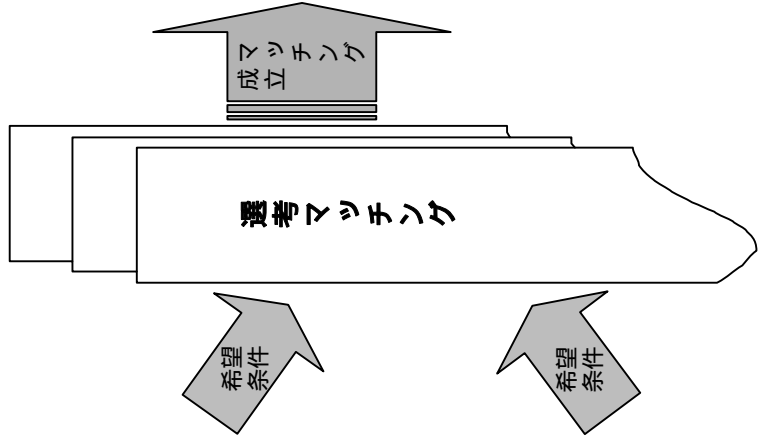
制度のイメージ

外国人留学生が日本、静岡の生活、文化に触れ、体験できる機会の創出
 ホストファミリー及び外国人留学生の負担を軽減するため、日帰り訪問(ホームビジット)が基本
 正月、お盆、祭り、誕生日などのイベントを中心に、年間複数回の交流
 必要に応じて、集団によるイベントの開催
 企業との連携による留学生の受入れ
 一般の募集広報のほか県国際交流員の学校派遣等で国際交流を体験した児童生徒の家族を対象に学校経由でホストファミリーを募集案内

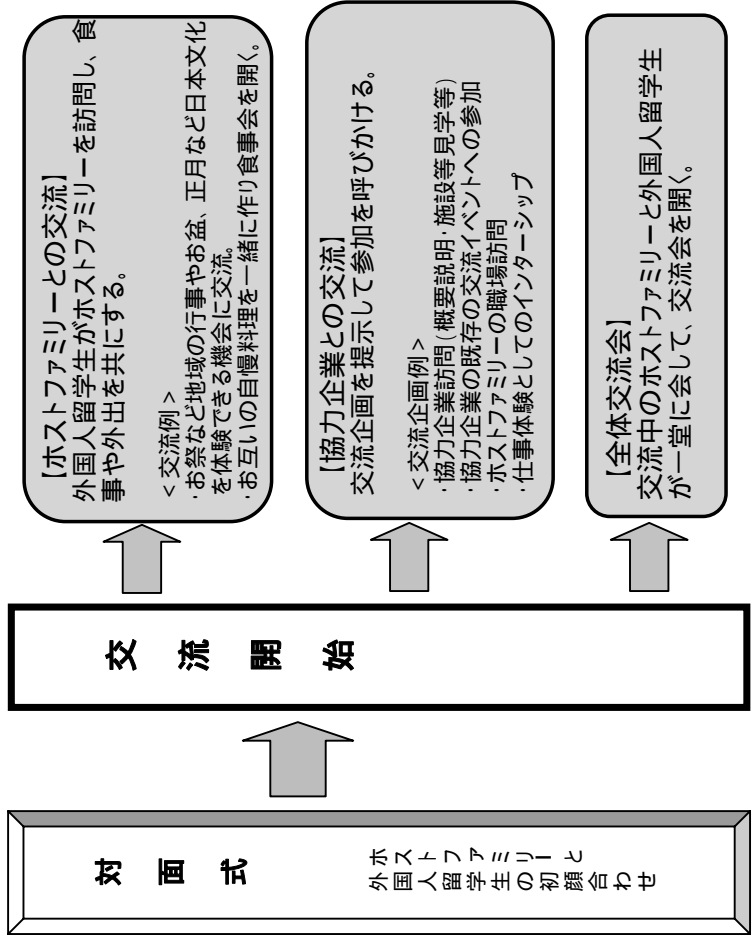
募 集



マッチング



交 流



令和2年度 静岡型ホストファミリー制度試行事業（案）について

1 趣旨

令和2年度は、「静岡型ホストファミリー制度」の企画・運営を検証するため、試行的に静岡市内の大学を対象として、企業との連携を中心に、プレ事業として実施する。

2 概要

区分	内容
実施主体	県、協力団体（交流事業実績団体等）
協力	経済団体、企業、ふじのくに地域・大学コンソーシアム
募集	ホストファミリー 県内企業2社程度から5家族程度 外国人留学生 県立大学及び静岡大学から5名程度 春（4～5月）と秋（9～10月）の2回募集する。
交流内容	ア ホストファミリーとの交流（ホームビジットが基本） イ 協力企業との交流（企業訪問、職場体験としてのインターシップ等） ウ 全体交流会（ホストファミリーと外国人留学生が一堂に会する交流）
企業との連携	募集協力 ホストファミリーの社内募集協力 企業交流企画 協力企業と協議し企画、実施

プレ事業（案）フロー

